

涙す母のありありと見ゆ

とあるのを見て深く心を打たれ、今でも忘れることができない。私が出した歌は

たらちねの母な憂いそ健やかに

我生きてありとつ国の涯

というのだったが、これは八位に入選した。この壁新聞に随感断想と称して何回か随筆を投稿したが、幸い毎回掲載してくれたのはうれしかった。読む物が何も無い無味乾燥な収容所の生活で字に飢えており、壁に張られたこの一枚の張り紙の前に立ちどまって、いろいろなことを思いながら食っているように貪り読むのだった。

シベリアの飢えも寒さも懐かしき

我老いぬれば恨みうすれて

カラカンダでの抑留生活

島根県 山本 久夫

四平街での終戦―そしてシベリアへ

昭和二十年八月初旬。ソ連軍がソ満国境を越え南下進撃してくるとの情報を聞いたのは、私たちの通称藤六八六五部隊が湖北省当陽県から一か月半に及ぶ夜間強行軍を経て、満洲四平街に入って間もなくのことである。

満二十二歳を迎えた私はこの四平街で陸軍少尉に任官し、第一小隊長として初年兵教育に当たっていた。初年兵といってもどこからどうして集まって来たのか、四十歳を超えた初老に近い召集補充兵である。携帯しているものは三八式歩兵銃はなく、中身は竹製か何かからぬ帯剣（ゴボウ剣）と一―二個の手りゅう弾（一個は自決用）と背のうだけで、かつての関東軍の面影はなかった。

全く覇気の見えないこの貧弱な恰好の兵士集団は、軍事訓練を十分受けた私の目には不吉な敗戦を予測させるものであった。訓練は、集めたサイダー瓶などの中に、ガソリンを詰めた即席手製の火炎瓶を右手にほく前進し、ソ連軍戦車に接近し、その銃口に投げつけるという対戦車肉薄攻撃訓練である。また、毎日さん壕（たこ壺）を掘ったり、各目の頭髮や爪を切って遺品とするなど、まことに非実戦的な訓練だったと思う。

八月九日、ついにソ連軍は国境を突破し南下との報に接し、私たちはすわ実戦とがぜん色めきたった。しかし、四兵街の私たちの陣地にはソ連兵は現れないまま八月十五日の終戦の日を迎えたのである。

私たち年代の者は、小学生のころから戦争とともに育てられた。平和への夢の実現を目指した中等教育の学びやでも軍国主義一色の参戦体制のまま、学業も繰り上げ卒業となり、いや応なしに軍隊に入った。そして将校になったとたん戦争は終わった。日本国は敗れたという。

この敗戦という大きなショックは虚脱放心状態に陥ったり血気にはやり逃亡する者も続出したが、満州にいた日本国軍人はもちろん、満鉄や企業等勤務の在満邦人はわけもわからず、全員戦争捕虜としてシベリアの地に強制抑留された。

初めて見たソ連兵

昭和二十年八月の暮れ、私が初めて見たソ連兵は、皮膚の色も白色、褐色といろいろあったが、日本兵より背は高く、恰好いいカーキー色の軍服を着ていた。マンドリン（自動小銃）を肩にかけ、左脇下で支えた姿が印象

的であった。武装解除により、中隊の兵器、弾薬をまとめてソ連軍本部へ納入する任務をもらった私は、数人の兵隊とともに出かけた。日本陸軍（歩兵）の武器の象徴ともいえる三八式歩兵銃もその銃身に刻まれた菊のご紋章をつぶし、あたかもまきを束ねるように荒縄で縛り上げ、断腸の思いで汚れたトラックに投げ込んで運んだ。

命令に従って集めた武器を無事届けたとき、ソ連兵の監視の中武器を受け取る側に、偶然にも同郷の大先輩の顔があった。お互いに一言敗戦を嘆いたあのひととき的情景は、今でもはつきり想起することができる。暮れゆく満洲の広野でただの一戦も交えることなく敗れた私たちは、わけもわからぬ勝利に酔い、傍若無人に振る舞うソ連兵に対して少なからぬ恐怖心で緊張した。

カラカンダ第八ラゲル

四年半にわたる私の抑留生活の場は、カザフ共和国のカラカンダ第八ラゲル（収容所）である。このラゲルは他の収容所とも大体同じような建物が何棟か並んでいる。この棟が私らが寝る場所で、部屋は中央にベーチカがあり、二段ベットが並べられ、板の上にマットと毛

布が一枚ずつ備えられていた。所内には別に炊事場、スクローワヤ（食堂）、バーニヤ（浴場）、医務室、クズネイツ（鍛冶工場）、倉庫やカントーラ（事務室）等の棟が建っている。ラーゲルの四隅は高い塀がめぐらされ、その内外二―三メートルの地面は砂をまいた立ち入り禁止の地帯である。有刺鉄線で囲みつなげた四隅には物見監視やぐらがって、マンドリンを肩にしたカンボーイ（警戒兵）が立哨していた。第八ラーゲルには、二―三百人の炭坑作業に従事する者と、一部地上で建築や道路造成等の仕事をする日本人俘虜がいたが、何分その正確な人数は全く不明であった。このラーゲルが受け持つ炭坑は、二六オスノムノーエとセストイビース。そして他に二―三の小さな炭坑があった。

作業編成は、当初は旧軍隊組織そのままの編成で、私は第一中隊第一小隊長として、三交替できる五十数人の戦友とともにシャフト（炭坑）で働いた（一年半ぐらいたつと、旧軍隊方式や階級による呼称等はなくなる）。お粗末な作業衣袴と黒いゴムの短靴をはいて、靴下は炭坑用独特のもので、長さ約六十センチ幅三十センチ弱の長

方形の厚手の綿布である。その布を足のつま先からきびすそして足首まで上手に包み込み、脱げないように縛るもので、うまく包まないとき冬季は皮膚が露出して凍傷になったりする。

カラカンダの夏は短かったが、地上温度四十度を超す日もあったし、逆に長い冬（九月末から三月末）は、零下四十度以下となり、寒いというより痛いといえる。防寒具なしで歩けば凍傷となり、手、足の一部を失うことになる。

ルースキーカンボーイ

就労のため収容所を出入りするとき、衛兵所ではカンボーイによる人数点検が行われる。四列縦隊では計算ができないようで、パピヤーチ（五列）に整列させ、先頭からアジン（一）、ドヴァ（二）、ツリー（三）、チチーレ（四）……と数えてくるが、途中でわからなくなるとまた引き返してやり直しをする。暑さのときはまだしも冬季厳寒のときは、吐く息は防寒帽のほお覆い周辺を白く凍らせ、まっげも太い白髪になる。ぶるぶる震え、足踏みしながら人員点検の終わるまで待つことは迷惑なこと

で、いらいらすることが多かった。カンボーイは単純なことでも命令されればその範囲内のことでは徹底するが、関係外のことには知らん顔をしていた。

炭坑（作業場）へ往復する道は、正規の道路ではなく、途中から石炭用貨車の走る線路上を歩いた。カンボーイは「ベストラ、ダワイ、ダワイ」とせき立てて、炭坑に到着するときに人員点呼して待合準備室に入る。ここでランプ受領し作業帽など服装を整備して、急勾配の坑道への通路を一行になっておりてゆく。通路は暗く狭く、ところどころに地下水がしみ出て、黒くぬかるみ、足をとられやすくなっている。また極めて不衛生、不謹慎なことながら通路中途の両サイドに点々として放尿脱糞の残骸が見られる。だれがどうして、いつこんな通路で用を足すのか。厳寒の野外で立小便をすると、雪上を黄色く染めてすぐ波紋状に固まってしまうし、大便の場合は落ちたものが同時に次々に固まって、先端が尖って高くなり、その頭を壊さねばならない。炭坑内では風雪もなく暖かで用便しやすいからだろうか。とにかく坑内にはこうした不潔なところがあちこちにあって注意が必要であった。

炭坑内で働く人々

地下二百メートル近くに及ぶ坑内では、いろんな仕事を分担した炭坑労働者が働いている。堀り出された石炭を運び、地上に送り上げるトロッコを操作するのはワゴンシキで、各組ともソ連人二人とヤポンスキー（日本人）数人が働いている。発破をかけて石炭層を砕くため削岩機を使う人（プリンシキ）は頑丈なソ連人。木柱を立て坑内の天井が崩れないように枠組みするクレピンシキはソ連人のほか一部は日本人が手伝っている。

この炭坑作業で一番多くの人数を必要とし、ノルマ達成のカギを握るのは炭坑夫で、各組とも十余人のヤポンスキーサルダート（日本人兵士）がスコップを手にした。坑内（採炭場）上方部から下方部坑道の石炭運搬用ワゴン（車両）まで炭粉をまき散らし騒音を立てながらコンベア（幅五十〜六十センチ、長さは坑道の深さによるが一般的に三十メートル余り）が動いている。そのコンベアに砕かれた石炭をスコップですくい投げ込む仕事をするのが炭坑夫である。

コンベアの故障がなく送り出す石炭の量がある限り、時の休息も許されず、八時間ぶっ続けの労働を強いられる。少しでも手を抜いて勝手に休んだりすると、ルースキーカマンジール（ロシア人の監督、指揮官）から「ダワイ、ダワイ、ラポータ」と大声で叱咤される。でも幸いなことにコンベアは八時間ぶっ続けて動くことはほとんどなかった。採炭夫がスコップを手放し腰をおろして小休止できるのはすくい出す石炭がなくなったとき、あるいはコンベアの移動、モーターの故障などでスレーサル（電工）が修理しているとき、または炭壁に発破をかけるときはもちろん、石炭を地上に運び出すワゴン（石炭車）やケーブルがとまったときである。いずれにしてもノルマを達成しないときは、日本人監督は叱られたり激励されたりした。ただし、意図的悪質と思われるサボタージュや怠惰によるニラポータ（仕事をしない）の場合、ドワースメナ（二組分十六時間労働）を命じられたり、一日当たり三百グラムの黒パンが半減され、プレミヤもなくなった。まさに「働かざる者食うべからず」であった。

私はカラカンダの炭坑で数人のルースキーカマンジールと顔合わせをしたが、特に忘れられない人がいた。入ソ一年日にカンダラーニンという年令五十歳近い白シロア人がいた。頭髪は白銀色、笑えば目尻に四本のしわが出る柔和な人柄で、仕事は積極的で厳しかったが、日本人個々に対しては好意的であった。また、ワツシヨキーンと呼ぶ四十歳前後の監督は、身長・ハメートル余りで、頑健な体軀の男である。ノルマが出ないと、すぐ立腹して「イビトワイヤマーチ」と悪口雑言し、持前の腕力と怒号で私らを酷使した。私も責任上、彼とは片言のロシア語でよく口論したが、覚悟しているとはいえ彼に対しては一種の恐怖感さえ抱いた。そのほか、カザックやウズベック出身の監督もいたが、私にとっては労働上必要のロシア語を教えてくれたり、お互いの生きざまを少しずつ話し合うことのできるよきソ連労働者であった。

炭坑内に発生するガスの有無を点検するため、バツテリランプのほかに手提げランプを手にしたルースキーマダム、中にはジェオチカ（娘）もいたが、定時的に坑内

を回っていた。金髪色白のウクライナ娘も、黒髪やや色黒のチチエンスキーもいたが、彼女らはヤポンスキー（日本人）に対して極めて同情的、好意的であった。仕事が終わって坑外に出ると、ときにはマホルカ（刻みたばこ）の包みや、乾パン、セイミチカ（ひまりの種子）などをそっと私たちに渡してくれる女性もいた。ヤポンスキーはカンボーイに監視引率され、団体行動でラーゲル間往復するのだから、彼女や一般のロシアの人たちと長い時間おしゃべりすることはできなかったが、ちょっとした待ち時間などに要領よく私たちに近づいて、「スクラーダモイ？」など話かけてくれた。

カラカンドのシャフト（炭坑）には、私ら日本人やドイツ人などの強制抑留者のほか、多数のソ連人囚人が働いていた。ロシア人、カザフ、キルギス、ウズベクなどの人たちが、遠くは白ロシア人、ウクライナ人もいた。ソ連全土には異なる言語や方言を話す百二十の民族が共存しているというが、まさにカラカンドも民族のるつぽといえた。

ソ連人が一番嫌い、憎んでいたのはゲルマンズスキー

（ドイツ人）で、第二次世界大戦の後遺症は大きかったようだ。同じワイナプリオヌイ（戦争捕虜）でも私たち働くヤポンスキーに対してはすぐく友好的であった。

差別しなかったソ連人

昭和二十三年（一九四八年）の夏だったか、私はペーリウチャースク（第一採炭場）のヤポンスキーカマンジールとして第三組（深夜零時から朝八時までの労働）の仕事を終え出坑した。すぐナリヤートのため事務所に赴かねばならぬが、蒸し暑かったその日はなぜか疲れがひどく、急斜面の坑道を上がるときからのどがからからに乾いて、とても水が欲しかった。（ナリヤートというのは作業を始める前に就労するヤポンスキーの氏名とその職種等をロシア文字で記入し、作業上の注意とその日の作業達成目標（ノルマ）について話し合う。また作業が終わるとその労働の成果を毎回記録し、提出する仕事である）私は一滴の水を求めて待合準備室を出て水道蛇口のある方まで歩いた。見ると大勢のソ連人婦女子や労働者がバケツなど持って、長い水汲みの行列をつくっていた。ああ、これでは時間もなくなっても水が飲めない、と

思いながらも一応行列の最後尾に並ぼうと列の中ほどまでくると、ブロンズの髪の毛のネッカチーフで包んだロシア人マダムが声高に、「炭坑の仕事は大変で疲れたでしょう、早くこの列の前に並びなさい。パジャルスター」と叫んで、私に水を飲ませてくれた。暑いところじつと並んで順序を待っていた人たちが、粉炭で顔や手を真黒に汚したヤボンスキーのため順番を譲って水を飲ませるといふ思いやりの心に触れて、本当にうれしく私は心から「オーチェン、スパシーボ！」（大変ありがとう）を繰り返して炭坑をあとにした。

また一九四九年のころ、私はナリヤートを終えて軽い食事をとりたく事務所近くにある食堂にはいったが、そんなに広くない食堂は満席の状態で、うろうろしていると、「ヤボンスキー、イジシュダア、サジイス」（日本人ここに来て座れ）と、きちっと正装したロマンスグレーのロシア人が声をかけてくれた。五く六人掛けのテーブルに、仲間らしい三人の男と談笑していた恰幅のよい人物であった。「スパシーボ」と遠慮しながら私は彼らと同じテーブルの席に腰をおろしたが、炭坑作業を終えたば

かりの汚れた顔と貧弱な作業衣袴の恰好であったと思う。そんな外見など問題にせず、「日本はどんな国か、どんな仕事をしていたか、父母は元氣か、早く日本に帰りたいか」などと話しかけ、自分たちが注文したテーブル中央の果物など「クーシヤチ、パジャールスター」（どうぞ食べなさい）と勧めてくれた。私は感謝しながら隣の人に「クトー、エータ」と尋ねると、何と中央にいる人はソ連共産党幹部で、この炭坑の最高責任者という偉い人であった。

日本ではこのような役職にある人がうす汚い服装の囚人や戦争捕虜と故なく同席して食事をともにすることなど想像もできないことだと思った。同時に一部のロシア人ではあるが、全く民族人種の差別をしない、明るく、気さくな言動と、何かほのぼのとする人間性の温かさに驚いた。

ラーゲルでの入浴と食事

労働が終わってラーゲルに帰ると、まず浴場に行く。浴場といっても湯船などはなく、四周の壁に取りつけられた数本の水道栓から適量の湯と水が出るし、シャワー

もある。しかし、その湯水も自由には使えない。石けんは洗濯に使うような粗末なもので、ぬらした体に直接両手でこすりつけるが、あまり泡も出ないし洗い流す湯水の量が制限されているから、汚れが落ちにくい。第三組の作業終了の場合は、入浴を終えるとそのまま食堂に行くが汚れがとれず下まぶたあたり炭でくま取りした者もいる。

食事の主食は黒パンで、麦を中心にコウリヤンなどの穀類を精白しない粉のままパンにしたもので、白パンより固く味も一定していない。この茶褐色の枕状の黒パンを私らは一人一食約三百グラムの基準で、スープをすすりながら食べるわけである。スープはバレイショや豆類と何かの肉を少々入れたもので、みそ汁のようなうまみはなく、味も素っ気なかった。

ラゲールに入って一年にならないころ、出されたスープがあまりにも臭く、油こく口にするとうき気を催すように、まともにのどを通らなかった。あとでそのスープはラクダの臓物と聞いて食欲を失ったこともある。しかし、いくら臭くまづいスープでも黒パンとともに腹の中

に入れないと、体が弱って仕事もできないと、鼻をつまんで一気かせいに飲み込んだ。日本人の中には食事が十分にとれなく空腹のため、捨てられた屑芋や残飯あさりをしたり、栄養失調で倒れた者もいた。ラーゲル内の生活は、初めも軍隊方式そのまま継承であったから、食堂にも将校用の席があったし、食糧も兵隊とは若干異なっていたようだ。すなわち、パンは同量の約三百グラムだが、穀物や野菜は兵隊が多く、将校は肉と砂糖がほんの少し多かったと聞いている。ラーゲル内の炊事をするのは同じ日本人であったから、メニューも次第に私たちの口に合う食事となったし、正月や記念日などには精いっぱいの特典献立ができて、我々の唯一の楽しみである食べることを少しでも満たしてくれた。

帰国

昭和二十五年二月十六日、私は八年ぶりに懐かしい祖国日本の地を踏んだ。ナホトカから船に乗り、日本の港に上陸するまでは、本当に帰国できるかどうか案じられていたのである。それは、各ラーゲルでダモイ（帰国）の決定を受けナホトカまで輸送されながら、この港の

ラーゲルや青空集会の人民裁判で“反動”“戦犯”の烙印を押されて、再度遠くの戦犯ラーゲルに送り戻される人も多くいた。また、乗船してから上陸する船中で、つるし上げにあつて絶命した人もあるなど、日本人同士による迫害もあつたと聞いたからである。私たちの乗った高砂丸は航行二日目に舞鶴の栈橋に静かに停泊した。“ああ、無事帰国できた、よかった”と全く感慨無量、文句なしに涙がほおをぬらした。

あのシベリアの地で厳しい風雪、寒さをしのぎ、粗末な食糧と過酷な労働に耐えて今ここに、ずっと思い、願ひ続けてきたタモイの夢が実現した。うれしくありがたいことである。

ソ連抑留雜記

静岡県 鈴木 速男

収容所へ着いたのは昭和二十年も押し詰まった十二月の下旬であつた。

思えば南満の綿帛を出発し、一路北上して黒河まで一か月、黒河で流水が始まった川を凍らせる作業を行い、川が氷に閉ざされるのを待って猛吹雪の日にブラゴエシチェンスクまで徒歩で行軍し、そこで貨車に乗り、チタイルクーツク、アルマアタ、タシケントを経て約一か月余り、やっとウズベック共和国はパミール高原のご真ん中にあるヒルコアというひなびた駅にたどり着いた。この間、五十トン有がい貨車を連ねた列車はノロノロ運行をしたり、夜通し走ったり、時には二日も三日も停車していたりで、好き勝手の旅に見えた。この入ソ行で一番難儀だったのは生理現象であつた。列車の途中の線路上でとまれば、貨車の中から飛び出した兵たちが一列横隊で大小の便の砲列をしく、有がい車上のソ連兵が早く乗れと空に向けて発砲する。機関車はポーポー汽笛を鳴らす。列車が一旦停車すれば、いつもこの状態が現出した。貨車の中には軽く開った便所らしきものはあつたが、このような状態でベゴワード地区の第二収容所へ入つたのであるが、これに加えた輸送中の給与が人間並みでなかったから、(その後も同じであるが)ほとんどの者は体